

一〇二三年八月二五日

湯殿より窓越しに見ゆ月涼し  
腰深く落として処暑の太極拳  
稔田の鹿の狼藉憎みけり  
石庭の一水白く秋立ちぬ

一〇二三年八月二十四日

扇風機祈る老母の背に向ける  
なぞへなす谷戸の棚田の稔かな  
雷雨来て地上の熱を冷ましけり  
喧嘩負け西瓜にかぶりつく子かな  
雨やんだよと告ぐるやに法師蟬

一〇二三年八月二三日

参磴を塞ぎし風の乱れ萩  
太陽光パネルが埋む枯野かな  
雨意兆す風に騒がしねこじやらし  
蔀戸に秋風通ふ薬師堂  
愛犬のつかずはなれず露まみれ

一〇二三年八月二二日

ペディキュアを塗られ微笑む生御魂  
遊ばれよ京の残暑を覚悟して  
残暑にも負けず青春切符旅  
傘立てに日傘尋めく診療所

なつき 素秀 むべ  
智恵子 澄子 澄子

一〇二三年八月二一日

世話役は老人会や地蔵盆  
先頭を行く老骨の夏帽子  
本殿の鈴緒取り替へ涼新た  
配達便受取りねぎらふ残暑かな  
風渡る葉擦れの稻の香りかな  
朝粥でもてなす京の残暑かな  
満天

一〇二三年八月二〇日

あひる 風 渡る葉擦れの稻の香りかな  
朝粥でもてなす京の残暑かな  
あひる 風 渡る葉擦れの稻の香りかな  
朝粥でもてなす京の残暑かな  
満天

一〇二三年八月一九日

漆黒の闇の高きに大花火

たか子

毎日句会みのる選・一〇二三年八月二七日

こすもす うつぎ ぽんこ  
あひる 風 渡る葉擦れの稻の香りかな  
朝粥でもてなす京の残暑かな  
あひる 風 渡る葉擦れの稻の香りかな  
朝粥でもてなす京の残暑かな  
満天